# マイスター・エックハルトにおける
# 万有内在神論

松　澤　裕　樹

## 1. 序論

中世ドイツ神秘思想の泰斗マイスター・エックハルト (Meister Eckhart, ca. 1260-1328) の著作は，教皇ヨハネス 22 世の勅書『主の耕地にて (In agro dominico)』(1329) による異端宣告を受け，数世紀にわたり歴史の表舞台から消え去る。その後，彼の著作が 19 世紀に再発見され，その学術的研究が始まると，彼に対する評価は大きく二分する。その象徴的な対比は，司牧的著作を中心とする彼のドイツ語著作集の編集者であるクヴィントと神学的著作を中心とする彼のラテン語著作の写本群を発見したデニフレのエックハルト評価に見て取れる。ドイツ語著作に着目したクヴィントが，エックハルトを神秘思想家であり，理性を超えた精神の領域における神秘的合一体験の証言者として高く評価した一方，ラテン語著作に着目したデニフレは，彼をスコラ学者であり，「汎神論 (Pantheismus)」のような異端的思想を説く劣化した思想家として切り捨てた[1)]。

しかし，エックハルトの存在論を「汎神論」とみなす見解は，研究が進展するにつれて徐々に下火を迎える。20 世紀後半になると，15 世紀イタリアのトマス・アクィナス注釈者であるカエタヌス (Thomas de Vio Cajetanus, 1469-1534) によるアナロギア論の分類に即して，エックハルトの存在論を

1)　香田芳樹『マイスター・エックハルト　生涯と著作』創文社，2011 年，3-9 頁。Vgl. K. Ruh, *Meister Eckhart. Theologe - Prediger - Mystiker*, München 1989, 11-17.

トマスとは異なる「帰属のアナロギア (analogia attributionis)」に分類しようとする見方が主流となる。そして今世紀に入ると，彼の存在論を新たに「万有内在神論 (Panentheismus)」の観点から捉え直そうとする動きが出てくる[2)]。これらの新たな研究はしかし，「万有内在神論」を提唱したドイツの哲学者カール・クリスティアン・フリードリヒ・クラウゼ (Karl Christian Friedrich Krause, 1781-1832)[3)]の思想を等閑視し，「万有内在神論」を単に「万有が神の内にある」ことを主張する思想として理解したという点に問題がある。そこで本論では，クラウゼの提唱する「万有内在神論」の内実を把握した上で，エックハルトの思想を「万有内在神論」の枠組において理解することの妥当性について検討してみたい。

## 2. クラウゼの「万有内在神論」

「万有内在神論」は，クラウゼ晩年の著書『哲学体系に関する講義 (Vorlesungen über das System der Philosophie)』(1828) において，「万有は神であり，神は万有である」と説く「汎神論」に対するアンチテーゼとして提唱された。

「万有内在神論」は，「万有は神である」と説く「汎神論」に対して，(1)「万有は神の内にある」，(2)「万有は神の外にある」という一見矛盾

2） Vgl. B. Wandruszka, Zwischen Pantheismus und Schöpfungsglaube - Überlegungen zu den Besonderheiten der Ontologie Meister Eckharts, in: C. Büchner und F. Löser (Hrsg.), *Meister Eckhart und die Freiheit, (Meister-Eckhart-Jahrbuch Bd. 12)*, Stuttgart 2018, 319-358.; A. Quero-Sánchez, Das panentheistische Verständnis der ‚Mystik'. Meister Eckhart und Nikolaus von Kues über die Nichtigkeit des Bedingten, in: J. S. De Murillo und M. Thurner (Hrsg.), *Von der Wissenschaft zur Mystik, (Aufgang. Jahrbuch für Denken, Dichten, Musik, Bd.6)*, Stuttgart 2009, 86-110.

3） 本邦において歴史に埋没した哲学者クラウゼの思想に再び光を当てたのは木村周市朗先生の功績である。木村周市朗「カール・クリスティアン・フリードリヒ・クラウゼ：その法哲学の諸前提」，『成城大学経済研究』第 228 号，2020 年，232-186 頁。木村周市朗「カール・クリスティアン・フリードリヒ・クラウゼの人類論における相互的生の社会構成論」，『成城大学経済研究』，第 232 号，2021 年，312-204 頁。

する二つの命題の同時成立を説く[4)]。クラウゼは，「一」なる神が概念的に「多」を含む万有とは区別されるという観点から「汎神論」を偽とみなす一方，「多」は「一」に内在するという観点から「万有は神の内にある」という命題を真とみなす[5)]。彼はまた，「一なる無限なる原存在 (das eine unendliche Urwesen)」である神が「有限」なる万有とは区別されるという観点から「汎神論」を偽とみなす一方，「無限」は「有限」を超越するという観点から「万有は神の外にある」という命題を真とみなす[6)]。

また，「万有内在神論」は，「神は万有である」と説く「汎神論」に対して，(3)「神は自らの内で万有である」[7)]，(4)「神は万有以前に万有を超えてある」[8)]という二つの命題の同時成立を説く。その論拠は，『人間性の原像 (Das Urbild der Menschheit)』(1811) において展開される創造論に即して，以下のように理解される。クラウゼは，神が万有を創造した際，万有を自らの内で「神の像 (das Ebenbild Gottes)」としてそれぞれの本質にしたがって不滅かつ神的なものとして作り出したという観点から「神は自らの内で万有である」という命題を真とみなす[9)]。また，クラウゼによれば，

---

4) Vgl. K. C. F. Krause, *Vorlesungen über das System der Philosophie*, Göttingen 1828, 253. “[...] also ist die Welt gedacht als außer und unter Gott als Urwesen, aber zugleich und ursprünglich auch als in, unter und durch Gott als das Eine, selbe, ganze Wesen.”

5) Vgl. a.a.O. 256. “In der Wesenschauung nun wird gefunden, dass das Ein von dem All wesenlich verschieden ist, weil der Gedanke: All, nach dem jetzigen Sprachgebrauche, schon den Gedanken der Vielheit in sich hat, und zwar der vereinten Vielheit, eines Vereinganzen, einer Totalität.”

6) Vgl. a.a.O. 253. “[...] denn, indem ich Gott als vor und über der Welt, das ist als Urwesen, unterscheide von der Welt, ist Gott als Urwesen abgegrenzt unterschieden von der ganzen Welt [...].”; Ders. *Das Urbild der Menschheit. Ein Versuch*, Dresden 1811, 6. “Gott ist das eine unendliche Urwesen, aber jedes Wesen in ihm ist endlich, beschränkt.”

7) Vgl. Krause, *Vorlesungen über das System der Philosophie*, 253. “Gott ist Alles in sich, und die Welt ist in Gott [...].”

8) Vgl. a.a.O. 253. “[...] Gott als ganzes Wesen ist vor und über Allem, was Gott in, unter und durch Sich ist, vor und über der ganzen Welt und allen endlichen Vernunftwesen.”

9) Vgl. Krause, *Das Urbild der Menschheit*, 5. “[...] die Welt mit allen innern Wesen

創造とは，時間を超えてある原存在としての神が[10]，万有に対して「時間における神的なものの形態」としての「生 (das Leben)」を与え続ける働きを意味する[11]。つまり彼は，時間を超えて永遠に存在する神が「生」として時間の内にある万有とは異なるという観点から「神は万有以前に万有を超えてある」という命題を真とみなすのである。

以上のように，クラウゼの「万有内在神論」を上記の四命題を満たす思想として捉えた場合，エックハルトの存在論はその枠組の内で理解されるのか。エックハルトの創造論と人間論において展開される存在論を分析しつつ，彼における「万有内在神論」の適用可能性について考察を進めたい。

## 3. エックハルトの創造論における「万有内在神論」

エックハルトの創造論は，流出論に基づいて展開される。「第一の流出」は，父なる神から子と聖霊が永遠に発出する「神性におけるペルソナの流出」であり，それが万有を時間の内に作り出す《第二の流出》ないし《創造》の先行的原因となる[12]。そして彼は，この二つの流出の構造を，神の

---

und Harmonieen ist göttlich, ein würdiges Werk und Ebenbild Gottes. [...] Deshalb ist jedes Geschöpf selbstständig, dem Ganzen wesentlich, und seinem Wesen nach unvergänglich, — es trägt das göttliche Ebenbild auf eigne Weise in sich. [...] Aber was Gott selbst ewig schuf, das schuf er in sich selbst, unvergänglich, zu seinem Gleichnis.”

10） Vgl. a. a. O. 539. “Das Urwesen selbst, und Alles was in ihm, ist mit seinem Urwesentlichen gleichsam vor und über aller Zeit, es ist ganz, und ewig.”

11） Vgl. a.a.O. 5. “Was Gott in ewiger Folge, ohne Zeit und über aller Zeit erschuf, das offenbart, in ewigen Bestehen zeitewig lebend, das ihm von Gott urangestammte Wesentliche in stetig neuer Gestaltung [...].”; a.a.O. 421. “Gestaltung des Göttlichen, das ist des Wesentlichen, in der Zeit, ist Leben; und so wie jedes Wesen in bestimmten Schranken göttlich ist, so gestaltet es an sich selbst auf eigene Weise, nach eignen Gesetzen, das Göttliche; es hat ein eigenthümliches Leben.”; a.a.O. 422. “Gott wiederholt seine ewige Schöpfung in der Zeit unendlichmal und unendlich vielfach [...].”

12） Vgl. In Ioh. n. 564, LW III, 492, 9-11. “[...] unum fons est primo primae emanationis, filii scilicet et spiritus sancti a patre aeterna processione; bonum autem fons est secundae, ut sic dicamus, temporalis productionis creaturae [...].”; In Exod. n. 16, LW II, 22, 7-8. “Hinc est quod emanatio personarum in divinis ratio est et praevia

本質と三つの神的ペルソナを指し示す四つの超越論的概念―「存在」,「一」,「真」,「善」―を用いて，次のように語り出す。

> 存在者ないし存在は，生まれざるものであり，生むものでもなく，生まれたものでもなく，始原なしにあり，他のものからあるのでもない。それに対して，一は，始原なしにあり，生まれざるものであるが，生むものである。真はしかし，生まれたものであるが，生むものではなく，他のものから始原を持つものである。善はしかし，他のものからあり，始原を持つものであり，生まれたものでもなく，生むものでもなく，創造するものであり，被造的なものを外部である存在の内へと作り出すものである[13)]。

第一に,「存在」は「非区別的で無限定なもの」である神の「本質」を指している。ここで，神的ペルソナの区別性はまだ非区別性の内に隠されており,「存在」としての神は，神的ペルソナの流出の始原ですらない[14)]。第二に,「一」は「多」なる神的ペルソナと万有の流出の始原，すなわち「第一の流出」の始原としての父なる神を指している。ここにおいて，非区別性の内にあった「存在」としての神は,「多」から区別された「一」

---

creationis.” エックハルトのテキストからの引用は，以下の全集版を用いた。Meister Eckhart, *Die deutschen und lateinischen Werke*, im Auftrag der Forschungsgemeinschaft (Hsrg.), Stuttgart 1936ff.（テキストは LW = Die lateinischen Werke, DW = Die deutschen Werke と略記。以下，巻数，ページ数，行数を記した。）

13） In Ioh. n. 564, LW III, 492, 3-7. “[...] ens sive esse est ingenitum nec gignens nec genitum, sine principio nec ab alio; unum vero est sine principio, ingenitum, sed gignens; verum autem est genitum, sed non gignens, habens principium ab alio; bonum autem est ab alio, habens principium, non genitum, tamen non gignens, sed creans, creata extra in esse producens.”

14） Vgl. In Ioh. n. 512, LW III, 443, 8-10. “Esse autem, tum quia ad intus et essentiam respicit, tum quia absolutum et indeterminatum, nullius productionis principium est secundum sui rationem. Ab indistincto enim et indeterminato nihil procedit.”

として，自らを他なるものとの関係の内に顕現させる[15)]。第三に，「真」は「一」としての父なる神から生み出された神の子を指している[16)]。第四に，《善》は万有を神の外にある《存在》の内へと作り出す《第二の流出》ないし《創造》の始原としての聖霊を指している。以上のように，エックハルトは，「第一の流出」を通して万有を神の内に「生み出す (gignens)」「一」としての父なる神と，《第二の流出》を通して万有を神の外に《創造する (creans)》ないし《作り出す (producens)》《善》としての聖霊を区別するのであり，この創造論はまさに，二つの命題―（1）「万有は神の内にある」，（2）「万有は神の外にある」―が同時成立する「万有内在神論」と合致するものである。では，エックハルトの創造論において，万有はいかなる観点から神の内もしくは神の外にあると言われるのか。

### 3.1.「第一の流出」における万有の存在様態

エックハルトによれば，「一」とは，知性だけに固有のものである[17)]。「一」としての父なる神は，「その存在全体が知性認識そのものであるような純粋な知性」であり[18)]，知性認識を通して，自らの内に神の子ないし言を生み出すとともに万有を「創造」する[19)]。つまり，父なる神をその始原

15） Vgl. In Ioh. n. 513, LW III, 444, 1-5. “Unum vero, quod inter praedicta quattuor immediatius se habet ad esse, et primo et minimo determinat ipsum, propter hoc ut primum determinatum est et esse determinans contra multum, ut patet X Metaphysicae, propter hoc ipsi uni competit ex sui ratione et proprietate esse primum productivum et patrem totius divinitatis et creaturarum.”

16） Vgl. In Ioh. n. 513, LW III, 444, 7-8. “[...] hinc est quod ab uno, ut unum et pater, producitur verum sive veritas proles genita a solo patre uno.”

17） Vgl. Serm. XXIX, n. 300, LW IV, 266, 11-12. “Ubi nota quod unitas sive unum videtur proprium et proprietas intellectus solius.”

18） Vgl. In Gen. I, n. 168, LW I, 314, 4-5. “[...] deus sit intellectus purus, cuius esse totale est ipsum intelligere.”

19） Vgl. Serm. XI, 1, n. 115, LW IV, 109, 2-4. “Unde essentia non generat in divinis nec verbum profert. Nec enim verbum gignit nisi sub ratione intellectus. Filius non procedit nisi per proprietatem intellectus.”; Gen. I, n. 6, LW I, 189, 7-8. “[...] principium, in quo *deus creavit caelum et terram*, est natura intellectus [...].”

とする「創造」とは，万有を神の知性の内部で永遠に「生み出す (gignens)」ことであり，それは，万有を神の知性の外部に時間的に《作り出す (producens)》聖霊による《創造》とは区別される[20)]。では，純粋な知性である父なる神の内部に神の子とともに生み出された万有とは，いかなる存在様態にあるのか。

> ここからまた，聖人たちは共通して，神が天地を始原の内に，すなわち万有の像であり，イデア的理念であるところの子の内に創造したと解釈する。それゆえ，「イデアを否定する者は，神の子を否定する」とアウグスティヌスは語っている。かくして，「神は」万有を「始原の内に創造した」のであり，すなわち理念の内で，イデア的理念にしたがって創造したのであり，異なる理念にしたがって，あるいは人間を，あるいはライオンを，そしてその他のものについても同様に創造したのである[21)]。

つまり，父なる神をその始原とする「創造」において，万有は，父なる神から生み出された「万有のイデア的理念 (ratio idealis onmium)」である神の子の内に「理念 (ratio)」として存在する。万有の「理念」は，それぞれの「種 (species)」にしたがって限定・区別されており，それ自体「多」な

---

20） Vgl. Quae. Pari. I, n. 4, LW V, 41, 11-12. “Et si dicatur quod immo, quia Eccli, 24: ‘ab initio et ante saecula creata sum’, potest exponi ‘creata’, id est genita.”; In Gen. I, n. 7, LW I, 190, 1-4. “Rursus tertio principium, in quo *deus creavit caelum et terram*, est primum nunc simplex aeternitatis, ipsum, inquam, idem nunc penitus, in quo deus est ab aeterno, in quo etiam est, fuit et erit aeternaliter personarum divinarum emanatio.”

21） In Gen. I, n. 5, LW I, 188, 9-189, 2. “Hinc est quod sancti communiter exponunt deum creasse caelum et terram in principio, id est in filio, qui est imago et ratio idealis omnium. Unde Augustinus dicit: »qui negat ideas, negat filium dei«. Sic ergo *deus creavit* omnia *in principio*, id est in ratione et secundum rationem idealem, alia quidem ratione hominem, alia leonem, et sic de singulis.”

るものである[22)]。しかし，「多」なる「理念」は，父なる神の内に生み出された「一」なる「万有のイデア的理念」の内にあるため，そこでは，多様な色が一なる光の内で隠されてあるように[23)]，「一」なる非区別的な様態で存在する[24)]。つまり，父をその始原とする「創造」とは，父なる神が「一」なる知性認識を通じて自身と万有を同時に認識することであり，ここでは，万有の「理念」における多数性が，神の知性認識における単純性と矛盾することはない。したがって，万有の「理念」は，父なる神の内にある限りにおいて，神の知性ないし知性認識そのものであり[25)]，それはまた，「真」としての神の子の内にあるという観点から，「真なる存在 (esse verum)」[26)]ないし「力動的存在 (esse virtuale)」[27)]とも呼ばれる。

ここで，「理念」としての万有は，知性としての父なる神の内にあるため，「万有は神の内にある」と同時に，それぞれの「種」にしたがって限

22） Vgl. In Gen. I, n. 115, LW I, 270, 5-10. “Quantum ad nunc autem sciendum quod creatura rationalis sive intellectualis in hoc differt ab omni creatura quae citra est, quod ea quae citra sunt producta sunt ad similitudinem eius quod in deo est et habent ideas sibi proprias in deo, ad quas facta dicuntur, sed rationes determinatas ad species distinctas ab invicem in natura, natura vero intellectualis ut sic potius habet ipsum deum similitudinem quam aliquid quod in deo sit ideale.”

23） Vgl. In Ioh. n. 533, LW III, 464, 9-465, 3. “Sexto absconditur omne superius in suo inferiori, et e converso inferius in suo superiori absconditur, verbi gratia: color in luce, lux in colore, calor in sole, sol in calore; absconditur sane res, ubi quidem vi est, sed tamen nec nomen eius est nec difinitio; sol enim nec in se calor est formaliter nec ipsi competit caloris diffinitio, non est tamen calidus vere, sed virtute. Septimo absconditur res in sui opposito; sic multitudo in uno et e converso, bonum in malo, privatio in habitu.”

24） Vgl. In Ioh. n. 13, LW III, 12, 15-17. “Ipse enim filius dei, *verbum in principio*, ratio est, »ars quaedam« »plena omnium rationum viventium incommutabilium, et omnes unum in ea«, ut ait Augustinus De trinitate l. VI capitulo ultimo.”

25） Vgl. In Ioh. n. 38, LW III, 32, 16-33, 4. “Ratio enim non solum habet, sed praehabet et eminentius habet, quia virtute, quod effectus habet formaliter. Iterum et ratio in intellectu est, intelligendo formatur, nihil praeter intelligere est. Iterum etiam coaeva est intellectui, cum sit ipsum intelligere et ipse intellectus.”

26） Vgl. In Gen. II, n. 55, LW I, 523, 8-9. “[...] lux et omne productum extra in natura habet esse verum, autequam fiat et facta sit.”

27） Vgl. In Ioh. n. 45, LW III, 37, 8-9. “Notandum quod res onmes universi non erant ‘ante constitutionem mundi’ nihil, sed esse quoddam virtuale habebant [...].”

定・区別された「多」なる「理念」として，父なる神それ自身とは区別されるため，「万有は神の外にある」[28]。したがって，「第一の流出」における万有の存在様態は，「万有内在神論」の枠組において理解される。

「理念」としての万有は，聖霊をその始原とする《第二の流出》によって神の知性の外にある《存在》の内へと《創造》されるが，そこで万有はいかなる存在様態をとるのだろうか。

### 3.2.《第二の流出》における万有の存在様態

聖霊をその始原とする《第二の流出》によって，万有の「理念」は，神的知性の外部へと落下し，知性認識とは異なる何らかの《存在》を有する《存在者》[29]，すなわち《形相的存在 (esse formale)》として存在するに至る[30]。つまり，《第二の流出》によって，万有は，神的知性の内部にある「理念」ないし「力動的存在」と，それを原因として神的知性の外部に流出した《形相的存在》という「二重の存在 (duplex esse)」を得ることになる[31]。

また，エックハルトは，万有が神的知性の外部に作り出される三段階の

---

28） Vgl. In Gen. II, n. 59, LW I, 527, 1-3. “Iterum etiam ratio ista cum sit distincta, alia huius et alia alterius, oportet concipere quod aliud dicat praeter nudam dei essentiam, in qua nulla alietas, nullus numerus, nec re nec intellectu, sed simplex unitas.”

29） Vgl. Quae. Pari. II, n. 10, LW V, 54, 2-4. “Ratio ergo entis descendit a causa. Ergo in descendente ratio entis invenitur. Et ideo in deo, a quo totum ens descendit, ratio entis non invenitur.”

30） Vgl. In Sap. n. 21, LW II, 342, 5-12. “Rursus tertio notandum quod res in sua causa essentiali sive originali non habet esse, similiter nec in arte sua nec in intellectu. [...] Omnia autem sunt in deo tamquam in causa prima intellectualiter et in mente artificis. Igitur non habent esse suum aliquod formale, nisi causaliter educantur et producantur extra, ut sint.”

31） Vgl. In Gen. I, n. 77, LW I, 238, 2-7. “Nota quod omnis creatura duplex habet esse. Unum in causis suis originalibus, saltem in verbo dei; et hoc est esse firmum et stabile. Propter quod scientia corruptibilium est incorruptibilis, firma et stabilis; scitur enim res in suis causis. Aliud est esse rerum extra in rerum natura, quod habent res in forma propria. Primum est esse virtuale, secundum est esse formale, quod plerumque infirmum et variabile.”

プロセスについて次のように語っている。第一段階は，形相因としての父なる神を始原とする「第一の流出」であり，そこで神は，神自身「によって (a)」，神自身「から (de)」，神自身「の内に (in)」，神の子とともに万有の「理念」を作り出す。第二・第三段階は，作用因・目的因としての聖霊を始原とする《第二の流出》の内部構造を表しており，第二段階の《作成 (factio)》では，神は神自身「によって」，神自身ではない「理念」「から」万有の《形相》・《本性》・《本質》を作り出し[32]，第三段階の《創造 (creatio)》では，神は「無 (nihilum)」「から」《存在》を作り出す[33]。

第二段階の《作成》において，「一」なる神的知性の内部にあった万有の「理念」は，神的知性の外部である「多」の内に落下し，そこで，「一」なる光の内に隠されていた色の多様性が現れるように，質料・時間・空間の内に《多》なる《形相》・《本性》・《本質》として現れる。しかし，時間の内に流出した万有の《形相》・《本性》・《本質》は，それ自体時間的なものではなく，時間の内にある永遠なるものであり，神はそこで万有に対して永遠なる働きを及ぼす[34]。

> 語ることはしかし，作り出すことである。「主が語られた。すると，それらは作り出された」（詩 33:9）。それゆえ，神は事物に形相と本性

32） Vgl. In Gen. I, n. 4, LW I, 187, 13-14. “Adhuc autem ipsa rerum ratio sic est principium, ut causam extra non habeat nec respiciat, sed solam rerum essentiam intra respicit.”

33） Vgl. Serm. XLIX, 3, n. 511, LW IV, 426, 5-12. “Est enim triplex gradus productionis in esse. Primus, de quo nunc dictum est, quo quid producit a se et de se ipso et in se ipso naturam nudam formaliter profundens voluntate non cooperante, sed potius concomitante, eo siquidem <modo> quo bonum sui diffusivum; praeterea quo modo velle principiaret fine nondum cointellecto. Secundus gradus est quasi ebullitio sub ratione efficientis et in ordine finis, quo modo producit quid a se ipso, sed non de se ipso. Aut ergo de alio quolibet, et dicatur factio; aut de nihilo, et est tertius gradus productionis, qui dicitur creatio.”

34） Vgl. In Sap. n. 179, LW II, 514, 6. “[...] onme quod deus agit in creatura, ipsum est natura rei [...].”

を与えることによって，それらの形相と固有性に随伴し，合致し，適合し，類似し，相応しいあらゆることを命令する一方で，それらに適合せず，類似せず，疎遠なあらゆることを禁止するのである[35)]。

神によって語り出された万有の「理念」は，《作成》によって《形相》・《本性》・《本質》として神的知性の外部へと流出するが，そこで神は「命令」するという仕方で万有に働きを及ぼす。万有における神の「命令」とは，時間的な外的行為とは異なり，質料・時間・空間によって決して妨害されることのない永遠なる内的行為を意味する。例えば，石における「下方への傾向性」は，石の《形相》における神の「命令」である。「下方への運動」という石の外的行為は，質料・時間・空間によって妨害されうるが，「下方への傾向性」という石の内的行為は，それらによって決して妨害されることがなく，石は自らの《形相》において絶え間なく神の「命令」に服している[36)]。

ただし，神的知性の外部に流出した《多》なる万有の《形相》・《本性》・《本質》は，《存在》なくしては「無」である[37)]。この「無」に《存

35） In Gen. II, n. 93, LW I, 559, 4-8. “Dicere autem est facere, Psalmus: ‘dixit, et facta sunt’. Deus ergo dando rebus formas et naturas praecipit eis omne consequens, omne conveniens, consonum, simile et proprium ipsis formis et earum proprietatibus, prohibet autem onme dissonum, dissimile et alienum ab ipsis [...].”

36） Vgl. In Gen. II, n. 162, LW I, 632, 3-11. “Verbi gratia inclinatio gravis deorsum neque tempore nec loco prohiberi potest [...]. Quamvis enim actus exterior, puta latio sive motus deorsum, taceat, dum grave in alto violenter tenetur, ne cadat, inclinatio tamen deorsum consequens formam lapidis, qua deus loquitur, mandat, iubet et praecipit, nunquam tacet, sed semper deo respondet, deo loquitur, praeceptum eius implet neque praeterit.”

37） Vgl. In Gen. I, n. 33, LW I, 211, 7-9. “Rursus notandum est tertio quod caelum et terra creata leguntur ante lucis productionem. Essentiae enim rerum creatarum sine luce, id est sine esse, *tenebrae* sunt, per ipsum autem esse formantur, lucent et placent.”; Serm. XLIV, 1, n. 439, LW IV, 368, 9-10. “Omne ergo creatum, omne duo, omne multum separans ab uno et per consequens a vero, a bono, ab esse est amarum, tenebra et quoddam nihil.”

在》を与える神の働きが，第三段階の《創造》である。

> 創造は存在を与える，ないし付与する。しかし存在は始原であり，万有の内で最初のものであり，存在以前には無しかなく，存在の外には無しかない。そして，この存在こそ神である。それゆえ，神は万有を「始原の内に」，すなわち自分自身の内に「創造した」。すなわち神は，万有を始原であり神自身である存在の内に創造したのである[38)]。

《創造》において，万有は神的知性の外部に流出するが，それはしかし，万有が完全に神の外部に流出したということを意味するのではない。というのも，《創造》の始原である聖霊は，自らの外部である「無」の内に万有を《創造》するのではなく，《存在》それ自体である自らの内部に万有を《創造》することによって，万有に《存在》を与えるからである[39)]。つまり，《創造》とは，《作成》によって「一」なる神的知性の外部に流出した《多》なる万有の《形相》を，《一》なる《存在》である聖霊の内部で《形相的存在》として顕現させることを意味する[40)]。比喩的に言えば，《創造》とは，《一》なる光としての聖霊が，《多》なる万有の《形相》・《本

38） Prol. op. tri, n. 17, LW I, 160, 14-161, 3. “[...] creatio dat sive confert esse. Esse autem principium est et primo omnium, ante quod nihil et extra quod nihil. Et hoc est deus. Igitur *creavit* omnia *in principio*, id est in se ipso. Creavit enim omnia in esse, quod est principium, et est ipse deus.”

39） Vgl. Serm. XXIII, n. 220, LW IV, 206, 6-13. “Ratio est, quia omne quod est a deo, est in deo. Primo, quia extra ipsum nihil est. Aut ergo nihil agit aut in se ipso agit [...]. Secundo, quia quod non est in deo, non est in esse, quia deus est esse. Quod autem non est in esse sed extra, non est et nihil est. Tertio, quia omne quod est, a deo est propter patrem, per deum est propter filium, in deo est propter spiritum sanctum, et ‘hi tres unum sunt’. Igitur quod est a deo, est in deo. Quarto, quia sicut accidentis esse est in esse, sic ‘esse a’ spiritu sancto est ‘esse in’ spiritu sancto.”

40） Vgl. Serm. XLIV, 1, n. 439, LW IV, 368, 11-14. “Sed omne multum hoc solo est, bonum est, delectabile est, quo unum est et unum participat, et unitas sive unum est, quod sapit in multo, et multum placet sive sapit et lucet propter unum sui. Iterum deus non est, non dat, non operatur, non lucet in multo, sed semper in uno [...].”

性》・《本質》を照らし出すことで，万有を《多》なる《形相的存在》として顕現させることである[41)]。また，聖霊は愛であり[42)]，万有を愛によって《創造》する[43)]。しかし，聖霊はそこで《多》なる万有それ自体を愛するのではなく，聖霊はむしろ，《多》なる万有が《一》なる《存在》を分有する限りにおいて愛するのであり，万有を《一》の内で愛し，《一》を万有の内で愛するという仕方で《多》なる万有を愛する[44)]。つまり，「第一の流出」が知性としての父なる神の自己認識を意味したように，《第二の流出》である《創造》とは，《存在》としての聖霊の自己愛を意味しているのである。

以上の考察から，《形相的存在》としての万有においては，二つの異なる観点から「万有内在神論」が成立していることがわかる。第一に，《形相的存在》としての万有は，《一》なる《存在》としての聖霊の内にあると同時に，「一」なる知性としての父なる神の外部にある。第二に，万有は《一》なる《存在》としての聖霊の内にあると同時に，《多》なる《形相》・《本性》・《本質》を有しており，それ自身において《一》なる《存在》である聖霊とは区別されるという観点から，聖霊の外にある。つまり，

41） Vgl. In Eccl. n. 50, LW II, 278, 8-9. “Rursus tertio formae, per quas agunt secunda agentia, id, quod sunt formae et actus, a deo sunt, qui est primus actus formalis.”; In Ioh. n. 151, LW III, 125, 9-12. “[...] lux enim, quae est esse, adest omnibus immediate, antequam distinguantur. Sic anima omnes partes sui corporis suo esse et per esse illuminat; adest enim materiae immediate ante omnem distinctionem. Distinctio enim omnis per formam est.”

42） Vgl. In Ioh. n. 734, LW III, 641, 6-7. “Propter quod fortassis solus deus amabilis est, quia scilicet in ipso id ipsum est amatum et amor, spiritus sanctus.”

43） Vgl. In Gen. I, n. 169, LW I, 314, 9-11. “Dicens ergo deum quiescere in rerum creatione docet nos deum creasse universum amore et per consequens voluntate.”

44） Vgl. In Sap. n. 255, LW II, 588, 1-5. “Notandum ergo quod ipsum esse absolute, simpliciter, formaliter, est id quod amat deus obiective: obiectum, inquantum, formale sub quo amat omne quod amat, sicut visus coloratum, et extra quod nihil amat deus, sicut nec visus saporem. Esse igitur ipsum est id, in quo, sub quo et propter quod amat deus omne quod amat, omnia in illo et illud in omnibus. Deus autem ipse est esse.”

「万有内在神論」における二つの命題―（1）「万有は神の内にある」，（2）「万有は神の外にある」―は，エックハルトの創造論において複層的な観点から成立すると言える。

では，残る二つの命題―（3）「神は自らの内で万有である」，（4）「神は万有以前に万有を超えてある」―もまたエックハルトの存在論と適合性を有するのだろうか。この点に関して，エックハルトの人間論を分析しながら考察を進めたい。

## 4. エックハルトの人間論における「万有内在神論」

クラウゼにおいて，「神は自らの内で万有である」という第三命題が成立する論拠は，神が自らの内で万有を「神の像」として創造したということにあったが，これはしかし，エックハルトの創造論とは相容れないものである。

> それゆえ，人間以下のあらゆる被造物は，神の似姿 (similitudo) にしたがって作り出されたのであり，何らかの理念 (idea) が神の内にあるということを知らねばならない。人間はしかし，神の全実体の像 (imago totius substantiae dei) にしたがって創造されたのであり，それゆえ，似たもの (simile) にしたがってではなく，一 (unum) にしたがって創造されたのである。「神はしかし，一なる者である」（申 6:4，ガラ 3:20）。理念はしかし，多なるものである。似たものもまた，常に多なるものに属する[45]。

以上のように，エックハルトは，神的知性の内に「理念」としてある万

45） In Ioh. n. 549, LW III, 479, 1-5 “Sciendum ergo quod omnis creatura citra hominem facta est ad similitudinem dei et idea alicuius in deo. Homo autem creatus est ad imaginem totius substantiae dei, et sic non ad simile, sed ad unum. ‘Deus autem unus est’, Deut. 6 et Gal. 3, ideae vero plures sunt. Etiam simile semper plurium est.”

有と「神の全実体の像」としてある人間を明確に区別する。万有の「理念」は，それぞれの「種」にしたがって限定・区別された「多」なるものであり，「一」としての父なる神とは区別されるゆえに，神に「似たもの」である。一方，人間は，神の実体・本質と区別されることのない「神の全実体の像」ないし「三位一体全体の像 (imago totius trinitatis)」として，神と区別されない「一」なるものである[46)]。では，「三位一体全体の像」としての人間は，父なる神の内でいかなる様態で存在するのだろうか。

### 4.1.「第一の流出」における人間の存在様態

エックハルトは，『ドイツ語説教』において「三位一体全体の像」としての人間について次のように語っている。

> 私が私の第一原因の内にあった時，そこで私はいかなる神も持たず，そこで私は私自身の原因であった。そこで私は何も望まず，何も求めなかった。というのも，私は自由な存在であり，享受する真理の内で私自身を認識する者であったからである。そこで，私は私自身を望み，他のいかなるものも求めなかった。私が望んだものが私であったのであり，私であったものを私は望んだのであり，ここで私は神とあらゆるものから自由であった。しかし，私が自由意志から外に出て，私の被造的存在を受容した時，そこで私は一人の神を持った。というのも，被造物が存在する前は，神は《神》ではなく，彼はむしろ，彼であったところのものであった。しかし，被造物が生成し，彼らの被造的存在を受容した時，そこで神は彼自身の内で《神》であったのではなく，

46) Vgl. In Ioh. n. 123, LW III, 107, 9-14. “Ipse unigenitur, a solo patre scilicet, nos geniti quidem, sed non ab uno patre. Ipse ergo per generationem, quae est ad esse, ad speciem et naturam, et protper hoc est filius naturalis, nos vero per regenerationem, quae est ad conformitatem naturae. Ipse ‘imago patris’, Col. 1, nos ad imaginem totius trinitatis, Gen. 1: ‘faciamus hominem ad imaginem nostram’.”

むしろ被造物の内で《神》であったのである[47)]。

「第一の流出」において，「三位一体全体の像」として父なる神の内に生み出された人間は，神と「一」なるものであり，そこでは，自らと区別された神が自らの原因として対象的に現れることはない。つまり，「三位一体全体の像」としての人間は，父なる神が自らの内に生み出した神の子によって自らを認識し，両者から発出した聖霊によって自らを愛するのと同様に，自らの外にいかなる原因も持つことなく，自らが始原となって，自らを認識し，自らを愛するという様態で存在する。そして，《第二の流出》の始原である聖霊もまた，第一原因の内にいる人間に対して対象的に現れることはないため，そこでは，聖霊が自らの愛によって万有を《創造》するように，私もまた，自らの自由意志によって《私》を被造的存在として《創造》する。

つまり，「三位一体全体の像」としての人間は，神の本質とは区別された「理念」としての万有とは異なり，神と区別されない「一」なるものであり，ここでは「万有は神の外にある」という「万有内在神論」の第二命題は成立しない。したがって，「第一の流出」における人間の存在様態に関する限り，エックハルトの存在論は「万有内在神論」と適合性を持たないのである。

---

47）Pr. 52, DW II, 492, 3-493, 2. “Dô ich stuont in mîner êrsten sache, dô enhâte ich keinen got, und dô was ich sache mîn selbes; dô enwolte ich niht, noch enbegerte ich niht, wan ich was ein ledic sîn und ein bekenner mîn selbes nâch gebrûchlîcher wârheit. Dô wolte ich mich selben und enwolte kein ander dinc; daz ich wolte, daz was ich, und daz ich was, daz wolte ich, und hie stuont ich ledic gotes und aller dinge. Aber dô ich ûzgienc von mînem vrîen willen und ich enpfienc mîn geschaffen wesen, dô hâte ich einen got; wan ê die crêatûren wâren, dô enwas got niht ‚got‘, mêr: er was, daz er was. Aber dô die crêatûren gewurden und sie enpfiengen ir geschaffen wesen, dô enwas got niht ‚got‘ in im selben, mêr: er was ‚got‘ in den crêatûren.”

### 4.2.《同化の恩寵》における人間の存在様態

「三位一体全体の像」としての人間は，《第二の流出》によって神的知性の外部に流出する。そこで，神の本質とは異なる《被造的存在》を受け取った人間は，神とは区別され，《神》が《私》とは区別された存在として対象的に現れてくる。では，《被造物存在》を受容した人間は，対象として現れた《神》といかなる関係を有するのだろうか。

すでに述べたように，《形相的存在》である万有に対して現れる《神》とは，《第二の流出》の始原としての聖霊であり，聖霊は《創造者》として，《一》なる《存在》である自らの内で《多》なる万有の《形相》を愛することで，自らの内で万有を《多》なる《形相的存在》として顕現させた。それに対し，《被造的存在》である人間に対して現れる《神》とは，《第二の流出》の始原である《創造者》であるだけでなく，神への還帰の始原である《報いる者 (retributor)》でもある[48)]。これに関して，エックハルトは恩寵論の観点から次のように語っている。

> 第一の恩寵は，いつものように，無償で，すなわち功徳なしに与えられる恩寵のことであり，第二の恩寵は，（神にとって）望ましい者にする恩寵のことである。第一の恩寵は，善きものと悪しきものに，そしてまたあらゆる被造物に共通のものであり，第二の恩寵は，ただ知性的な者と善き者にのみ固有のものである。［…］さらに，第一の恩寵は，神からのある種の流出，出て行くことの内にあり，第二の恩寵は，神それ自身の内へのある種の還流，戻り行くことの内にある[49)]。

48） Vgl. In Sap. n. 46, LW II, 372, 2-3. “[...] quia esse iustorum in deo est, non solum ut deus est esse, quo modo omnes creaturae in ipso, ut creator, sed in deo sunt, ut retributor est.”

49） Serm. XXV, 1, n. 258f, LW IV, 235, 6-237, 2. “Prima usitate dicitur gratia gratis, id est sine meritis, data, secunda dicitur gratia gratum faciens. Prima est communis bonis et malis et etiam omnibus creaturis, secunda est propria tantum intellectivis et bonis. [...] Adhuc prima gratia consistit in quodam effluxu, egressu a deo. Secunda

第一の恩寵は，《創造》の始原である聖霊が，神的知性の外部に流出することで，人間を含む万有に無償で《存在》を与える《神》の働きである。それに対して，第二の恩寵は，知性的存在者である人間の功徳に応じて与えられる人間に固有のものであり，人間の功徳に《報いる者》としての《神》が，神的知性の外部に流出した人間を再び神的知性の内部に還帰させ，そこで「再誕生 (regeneratio)」させる働きである。これはすなわち，神的ペルソナの流出の始原である父なる神が，「三位一体の像 (imago trinitatis)」を認識しうる知性的存在者である人間の内に，父なる神と「一」なる「存在」である「神の子」を生み出す働きである[50)]。では，第二の恩寵による人間の神への還帰は，いかなるプロセスを通して完遂されるのか。

エックハルトによれば，《被造的存在》としての人間の魂には，本性的に「神の像 (imago dei)」と「被造的事物の像 (imagines rerum creatarum)」が刻印されている。しかし，「神の像」は，彫像が素材である木材の内に隠されているように，魂の表面を覆う「被造的事物の像」によって隠されている[51)]。そこで，父なる神は，人間に自らの本性の内に刻印された「神の

---

consistit in quodam refluxu sive regressu in ipsum deum.”

50） Vgl. Serm. XXV, 1, n. 258, LW IV, 235, 9-236, 7. “Prima procedit a deo sub ratione et proprietate entis sive boni potius, Augustinus: »quia bonus est, sumus«. Essentia anim ut sic non generat, sed nec creat nisi in supposito. Secunda gratia procedit a deo sub ratione et proprietate personalis notionis. Propter quod ipsius capax est solum intellectivum, in quo relucet proprie imago trinitatis. Rursus deus sub ratione boni est prncipium bullitionis in se ipso, quae se habet causaliter et exemplar‹iter› ad ebullitionem.”; Vgl. Serm. XXV, 2, n. 263, LW IV, 239, 10-240, 5. “*Gratia dei id dum quod sum*. Nota primo quod gratia est ebullitio quaedam parturitionis filii, radicem habens in ipso patris pectore intimo. [...] Item respectu suscipientis gratiam gratia est confirmatio configuratio sive potius transfiguratio animae in deum et cum deo. Secundo dat esse unum cum deo, quod est plus assimilatione. Nota quomodo verbum assumpsit naturam, quae est aequaliter ad omnem hominem.”

51） Vgl. In Gen. II, n. 189, LW I, 661, 11-12. “Secundum est quod in anima cuiuslibet hominis naturaliter est impressa imago dei, celestis, et imago terreni sive animalis.”; In Gen. I, n. 301, LW I, 438, 1-439, 1. “Obducitur autem, obumbratur et occultatur, vel per imagines rerum creatarum superinductas [...]. Revelatur autem haec imago, ut appareat, per eiectionem imaginum superinductarum [...].”

像」を認識させるべく，第二の恩寵を通して，あらゆる人間に共通である人間本性を受容した神の子イエス・キリストを神的知性の外部に生み出したのである[52)]。しかし，エックハルトは，「人間のために，私とは異なる個体であるキリストの内で肉となった言が，私もまた神の子となるために，私の内でもペルソナ的に肉にならないならば，それは取るに足らないことである」[53)]と語る。つまり彼にとって，キリストのペルソナにおける言の受肉は，その内に「神の像」が刻印された人間本性の高貴さを外的に告知する出来事に過ぎず，個々の人間はむしろ，キリストを模範として，第二の恩寵を自らのペルソナの内で受容し，神的知性の内へと還帰する「再誕生」を成就させることが要求されるのである。

父なる神はしかし，「神の像」ないし「神の子」を受容する準備ができていない人間に対して，直接的に恩寵の働きを及ぼすことができない。それは例えば，火が木片の内に自らの形相を生み出し，木片を着火させるには，まず火の形相から流れ出した熱を介して，木片の内にある不純物を取り除き，自らに同化させる必要があるのと同様である[54)]。エックハルトによれば，自らの形相を与える《種的形相の恩寵 (gratia specificae informationis)》は，自身から流出する《同化の恩寵 (gratia assimilationis)》を通して，恩寵を受容する者をその受容に向けて準備する。それゆえ，父なる神をその始原とする「種的形相の恩寵」が魂の内に「神の子」を生み出すには，まず

52） Vgl. Serm. XLII, 2, n. 423, LW IV, 356, 8-12. “[...] rursus forma ipsa finis est et intentio omnium alterationem praecedentium et ipsius generationis ignis — sic per omnia filiatio dei sive quod quis sit dei filius Iesus Christus est principium et radix, fundamentum et nexus et finis remissionis peccatorum et salutis, omnis gratiae et ‘fons vitae’.”

53） In Ioh. n. 117, LW III, 101, 14-102, 2. “Parum enim mihi esset *verbum caro factum* pro homine in Christo, supposito illo a me distincto, nisi et in me personaliter, ut et ego essem filius dei.”

54） Vgl. In Ioh. n. 521, LW III, 450, 4-7. “Gratia autem, ut dictum est, signum non facit, cum sit in essentia, non in potentia animae. Essentia enim ad esse respicit, potentia ad opus. Sic enim forma ignis per se non calefacit immediate nisi mediante calore ab ipsa fluente, sicut potentia ab anima, virtus a gratia.”

自身から流出した聖霊をその始原とする「同化の恩寵」を通して，「神の子」の受容に向けて人間の魂を準備しなくてはならない[55)]。

エックハルトによれば，人間本性の内に刻印された「神の像」が覆い隠されているその原因は，人間の罪にある[56)]。彼は，アウグスティヌスにしたがって，《善》それ自体である神への愛を，あらゆる善と功徳の始原であり，あれこれの部分的な《善》である被造物への愛を，あらゆる罪の始原とみなす[57)]。つまり人間は，被造物への愛によって罪深き者となるのであり，再び神を愛するためには恩寵の働きが必須となる[58)]。この恩寵こそ，聖霊をその始原とする《同化の恩寵》である。聖霊は《愛 (amor)》を通して人間に《徳的存在 (esse morale)》ないし《良知 (synderesis)》を与えることで[59)]，人間を絶えず《善》それ自体である神へと傾向づけ[60)]，罪深き人間

55）Vgl. In Ioh. n. 182, LW III, 151, 6-12. “Exempli gratia: ignis agit in lignis calorem et ipsa assimilat sibimet in calore, et hoc quidem de gratia est quod sint calida. Generans tamen ignis, in quantum generans, non sistit in calore sive calefatione ligni, sed hanc gratiam ordinat ad generationem formae substantialis, quae est maior perfectio, et sic gratiam calefactionis et assimilationis dat pro gratia specificae informationis, ut scilicet calefaciendo et assimilando formae substantialis lignum sit capax.”

56）Vgl. In Ioh. n. 575, LW III, 504, 6-9. “‘filii’, inquit, ‘dei sumus’ per imaginem, Psalmus: ‘in imagine pertransit homo’ etiam peccando; ‘sed non apparet’, utpote velata peccato; ‘cum autem apparuerit’, ‘revelata facie’, Cor. 3, ‘similes ei erimus’, reformata imagine per gratiam.”

57）Vgl. In Gen. II, n. 195, LW I, 667, 4-8. “Voluntas boni ipsa est amor dei; voluntas vero huius aut huius boni ipsa est amor sui, amantis scilicet. Primus amor secundum Augustinum principium est omnis boni et omnis meriti, constituens civitatem dei und paradisi. Secundus amor principium est omnis peccati, constituens civitatem diaboli et inferni.”

58）Vgl. In Gen. II, n. 145, LW I, 613, 6-7. “Status autem hominis post peccatum est, quando per gratiam reordinatur homo in deum.”

59）Vgl. In Sap. n. 224, LW II, 559, 8-9. “[...] dilectio dei respiciat ipsum rerum omnium esse naturale, amor vero respiciat ipsum rerum bene esse sive esse morale.”

60）Vgl. In Gen. II, n. 199, LW I, 672, 3-8. “Semper enim synderesis manet malo remurmurans, ad bonum inclinans etiam in damnatis. [...] Hinc enim synderesis fortassis dicta est quasi sine haeresi, id est divisione a bono. Vel synderesis a syn-, con-, et haereo, quasi semper cohaerens bono.”; Serm. VI, 3, n. 65, LW IV, 63, 6-7. “Secundo, quia amor boni absolute, non huius aut huius, caritas est, forma virtutum est et mater sive parens et fovens.”

を《有徳者 (virtuosi)》へと変容させる。では，《徳的存在》を受容した《有徳者》とは，いかなる様態で存在するのか。

エックハルトによれば，意志の形相的対象は《善》であり，能力としての意志は，その全存在をその形相的対象から受容する[61)]。しかし，あれこれの《善》である被造物は，《一》なる《存在》である聖霊の内にある限りにおいて《形相的存在》を有するため，それ自身においては非存在ないし無である[62)]。したがって，それ自体無である被造物を愛することは無を受容することであり，それによって，能力としての意志は無に帰してしまう。それに対し，《同化の恩寵》によって被造物への愛から離れ，《善》それ自体である神を愛するならば，意志はそこで神から《徳的存在》を受容する。しかし，ここで人間は，《徳的存在》を自身の内に所有するような仕方で受容するのではなく，神を愛し続ける限りにおいて，絶え間ない生成の内で《徳的存在》を受容するのである[63)]。

ここで確認したいのは，神的知性の外部に流出した人間は，同じ聖霊をその始原とする二つの異なる恩寵から二つの異なる《存在》を受容しているという点である。第一の恩寵は，《愛 (dilectio)》を通して万有に《存在》を与える《創造者》の働きであるが，人間もまた他の被造物と同様に，この恩寵の働きによって《被造的存在》を受容する[64)]。ここで，《被造的存在》としての人間は，《存在》である聖霊の内にあると同時に神的知性の外にあるため，人間が《被造的存在》である限り，神の内にあると同時に

61） Vgl. In Ioh. n. 677, LW III, 591, 4-6. “[...] obiectum formale voluntatis, a quo ut a radice originali ita ipsa trahit totum suum esse, ut potentia est, sicut totum suum esse, ut ens est, trahit a subiecto, est bonum.”

62） Vgl. In Ioh. n. 543, LW III, 474, 8-9. “Amando ergo se ipsam amat deum et se ipsam odit; esse enim est a deo, a se ipsa non esse sive nihil [...].”

63） Vgl. In Sap. n. 45, LW II, 368, 4-7. “Virtutes enim, iustitia et huiusmodi, sunt potius quaedam actu configurationes quam quid figuratum immanens et habens fixionem et radicem in virtuoso et sunt in continuo fieri, sicut splendor in medio et imago in speculo.”

64） Vgl. Anm. 60.

神の外にあるという「万有内在神論」が成立している。一方，第二の恩寵である《同化の恩寵》は，《愛 (amor)》を通して人間に《徳的存在》を与え，《報いる者》として，人間を神的知性の内へと還帰させる準備をするが，あらゆる人間がこの恩寵を受容するわけではない。それゆえ，《報いる者》としての聖霊の内にあるのは，神を愛する善き人間だけであり，被造物を愛する罪深き人間は神の外に留まるのである。

以上，《同化の恩寵》における人間の存在様態を考察してきたが，善き人間は，《徳的存在》の内にあると同時に神的知性の外にある一方，罪深き人間は，《存在》の内にあると同時に《徳的存在》の外にあるのであり，人間が《同化の恩寵》を受容するか否かによって，異なる観点から「万有内在神論」が成立することが明らかとなった。

### 4.3.《種的形相の恩寵》における人間の存在様態

聖霊をその始原とする《同化の恩寵》を通して，第二の恩寵を完全に受け入れる準備が整った善き人間の内には，《種的形相の恩寵》である「神の子」が生み出される[65]。この恩寵は，人間知性の本性的働きを通して魂の内に生み出された「被造的事物の像」を取り除き，魂の内に隠されていた「神の像」を顕在化させる[66]。そしてエックハルトは，この二つの恩寵の関係を，認識と愛の関係として理解する。一般的に，人間は自らが認識

65）Vgl. Ioh. n. 115, LW III, 100, 13-14. “Filii autem sumus, si amore boni solius, ut bonum est, operemur singula.”

66）Vgl. VAb, DW V, 412, 6-413, 3. “Und dâ von, sol der mensche gote glîch werden, als verre als ein crêatûre glîcheit mit gote gehaben mac, daz muoz geschehen mit abegescheidenheit. Diu ziuhet danne den menschen in lûterkeit und von der lûterkeit in einvalticheit und von der einvalticheit in unwandelbærkeit, und diu dinc bringent eine glîcheit zwischen gote und dem menschen; und diu glîcheit muoz beschehen in gnâden, wan diu gnâde ziuhet den menschen von allen zîtlîchen dingen und liutert in von allen zergenclîchen dingen.”; Serm. XXV, 2, n. 268, LW IV, 244, 3-4. “Tertio apparet quod est etiam incognitum opus gratiae dei intellectui stanti in solo lumine naturali.”

した対象に対して愛を発するのであり，人間が被造物を愛する際には，認識によって「被造的事物の像」が魂の内にすでに生み出されていることが前提となる。したがって，人間が《同化の恩寵》を通して神を愛する場合，そこではすでに，《種的形相の恩寵》である「神の像」が魂の内に生み出されていることになる。では，《種的形相の恩寵》である「神の像」ないし「神の子」を受容した人間は，いかなる様態で存在するのだろうか。

この問いに対して，エックハルトは二つの異なる観点から答えている。彼は，主にラテン語著作において，《種的形相の恩寵》を受容する場合も，《同化の恩寵》を受容する場合と同様に，「神の子」を自身の内に所有するような仕方で受容するのではなく，鏡の内に神の像が映り込むような仕方で，絶え間ない生成の内で受容するとみなしている。この第一の観点においては，人間は神の像を映し出す知性を自らの所有とする《被造的存在》として，まだ完全に神的知性の内に還帰しておらず，《種的形相の恩寵》の始原である父なる神が人間に対してまだ対象化された状態にある。しかし彼は，ドイツ語著作においてこれを超える第二の観点から「神の子」の受容について語り出す。

> さあ，ここからしっかりと集中して聞いてほしい！私がかつてよく語ったことであり，偉大な教師たちもまた語っていることであるが，人間はそこで神が働きうる神固有の場所でありうるほどに，内的・外的にあらゆる事物や働きから自由でなくてはならない。しかし私たちは今，これまでとは違ったことを語ろう。つまり，人間があらゆる被造物と神と自分自身から自由であったとしても，神がその人間の内に働く場所を見つけるということがまだあるならば，その限りにおいて，人間は極限の貧しさにおいては貧しくはないと。なぜなら，神は自身の働きにおいて，神がその内で働きうる場所を人間が自身の内に持つということを求めていないからである。むしろ，神が魂の内で働こう

とする際に，その内で神が働こうとする場所が神自身であるほどに―神は喜んでそうするが―，人間が神とあらゆる神の働きから自由であるならば，それが霊の貧しさなのである。[…] まさにここで，この貧しさの内で，人間は，自身がかつてあり，今あり，常にとどまるところの永遠の存在に到達するのである[67]。

ここで，第一の観点から第二の観点への移行が語られる。第二の観点において，人間はもはや《種的形相の恩寵》を受容する場所を《被造的存在》である自らの所有とすることはなく，《被造的存在》から完全に離れて神的知性の内へと還帰する。ここで，恩寵を与える《神》とそれを受容する《被造的存在》という両者における区別性が完全に解消される。しかしそれは，《被造的存在》である人間が《神》になることを意味するのではない。エックハルトによれば，「突破 (durchbrechen)」と語られるこの還帰において，「私はあらゆる被造物を超えており，神でも被造物でもなく，むしろ私は私があったところのものであり，私が今も，そしてこれからも絶えることなくあり続けるところのものである。」[68] つまり，私は《被造的存在》としての《私》に対して現れる《神》から解放され，私が私自身

67） Pr. 52, DW II, 499, 9-501, 1. “Nû merket hie mit vlîze und mit ernste! Ich hân ez ofte gesprochen, und sprechent ez ouch grôze meister, daz der mensche alsô ledic sol sîn aller dinge und aller werke, beidiu innerlîche und ûzerlîche, alsô daz er möhte sîn ein eigen stat gotes, dâ got inne möhte würken. Nû sagen wir anders. Ist daz sache, daz der mensche aller crêatûren und gotes und sîn selbes ledic stât, und ist noch daz in im alsô, daz got stat vinde in im ze würkenne sô sprechen wir: als lange daz ist in dem menschen, sô enist der mensche niht arm in der næhsten armuot. Wan got enist daz niht meinende in sînen werken, daz der mensche habe eine stat in im, dâ got inne müge gewürken; wan daz ist diu armuot des geistes, daz er alsô ledic stâ gotes und aller sîner werke, welle got würken in der sêle, daz er selbe sî diu stat, dar inne er würden wil, — und diz tuot er gerne. [...] Alhie, in dirre armuot sô ervolget der mensche daz êwic wesen, daz er ist gewesen und daz er nû ist und daz er iemer blîben sol.”

68） Pr. 52, DW II, 504, 9-505, 1. “[...] sô bin ich ob allen crêatûren und enbin weder got noch crêatûre, mêr: ich bin, daz ich was und daz ich blîben sol nû und iemermê.”

の原因であった私の第一原因の内に還帰するのであり，神が自らの内で，自らを認識し，自らを愛するのと同じように，そこで私は自由な存在として，自らの内で自らを認識し，自らを愛する存在へと立ち返るのである。そこで，神と私はそれぞれ自らの根底から自由な働きをなすのであり，エックハルトはその働きに本来的な「生」をみる。

> 神の根底 (grunt) は私の根底であり，私の根底は神の根底である。私はそこで，神が神固有のものから生きるように，私固有のものから生きる[69)]。

「万有内在神論」の第四命題において，「生」は「時間における神的なものの形態」として，永遠に存在する神とは区別されるものであり，それは，エックハルトにおける万有の《形相》と同様の位置づけを有するものであった。しかし，エックハルトにおける「生」とは，永遠なる神と第一原因の内にある私の自己認識を意味しており，彼の人間論において第四命題は成立しない。また，《種的形相の恩寵》を受容することで完全に神的知性の内に還帰した人間は，「第一の流出」における人間の存在様態と同じように，神と区別されない「一」なるものとして存在するのであり，「万有は神の外にある」という「万有内在神論」の第二命題もここでは成立しない。

## 5. 結論

以上，クラウゼの「万有内在神論」を上記の四命題を満たす思想として捉え直し，それがエックハルトの創造論と人間論において適用されるか否かについて考察を進めてきた。その結果，(1)「万有は神の内にある」，

69) Pr. 5b, DW I, 90, 8-9. “Hie ist gotes grunt mîn grunt und mîn grunt gotes grunt. Hie lebe ich ûzer mînem eigen, als got lebet ûzer sînem eigen.”

(2)「万有は神の外にある」という二命題が，エックハルトの創造論と人間論の一部において成立することが明らかになった。したがって，エックハルトの存在論は，その一部が「万有内在神論」の枠組において理解されうるが，クラウゼの思想と一致しない部分も散見された。まず，人間論においては，人間が第一原因の内にある限りにおいて，人間は「神の外にある」という存在様態を喪失するため，エックハルトの存在論は，ここで「万有内在神論」の枠組から逸脱する。また，クラウゼは，第三・第四命題が成立する論拠として，神が万有を自らの内に「神の像」として創造したという点，そして，永遠に存在する神が時間の内にある「生」としての万有とは異なるという点を挙げていた。それに対し，エックハルトは，ただ知性的存在である人間だけを「神の像」とみなし，また「生」を永遠なる神の自己認識とみなしており，彼において「万有内在神論」を支えるその論拠は成立しない。以上の考察から，「万有内在神論」は，エックハルトの存在論の一部においてのみ適用可能であり，彼の思想全体を包括する理論としては適用されえないということが明らかとなった。

付記

本稿は科研費 (20K12814) の助成を受けたものである。